

見えない障害に対する 偏見に関する研究

＜吃音障害に関する介護学生の認識＞

聖隷クリストファー大学
社会福祉学部
介護福祉コース
山本 爽真

1

I 背景① 社会的な背景(1)

- * かけがえのない個人として尊重
- * 共生する社会
- * 社会参加の機会を確保
- * 選択の機会を確保
- * 障壁となるような（中略）ものの除去

* 参照：厚生労働省
「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律」

2

I 背景① 社会的な背景(2)

目に見えない障害（例）
学習障害（LD）・脳外傷・心理または精神障害
注意欠陥多動性障害（ADHD）・てんかん
アスペルガー障害・吃音症

* 参照：DINF 障害保健福祉研究情報システム
「目に見えない障害のある大学生の就学支援：アメリカモンタナ大学の事例」

3

I 背景② 筆者の問題意識

- * 大学2年次の秋にYouTubeを通して初めて知った。
- * 吃音症は見えない障害で、世間からも中々認識してもらおうことが難しい障害であると考えている。
- * 吃音症を抱え込む方は生活上でどのようなことにお困りであるのかを実態的に明らかにする。

4

II 方法①② 目的及び用語の定義

目的：言語による障害の実際や言語の障害に関する必要な支援を明らかにすること。

用語の定義：吃音症は、話し言葉が滑らかに出ない発話障害のひとつ。単に「滑らかに話せない（非流暢）」と言ってもいろいろな症状がある。

*参照：国立障害者リハビリテーションセンター「吃音について」

5

II 方法③ 具体的な方法

質問紙調査・留め置き法：社会福祉や介護福祉を学ぶ学生に対する、質問紙調査を作成し、調査結果から介護学生の意識を明らかにする。

調査期間：2025年5月28日（水）から2025年6月26日（木）まで

*結果を通して、見えない障害に対する偏見に関しての変容や、コミュニケーション障害に対する正しい理解を促すことを取り組みとした。

6

III 結果① 研究対象

配布数146枚。回収数137枚。有効回答数131枚。

		配布数	回収数
大学	1	24	22
	2	49	49
	3	16	16
	4	13	12
専門学校	1	33	27
	2	11	11

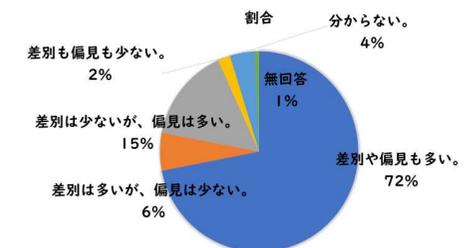
7

III 結果② 単純集計の抜粋 (1)

*障害に対する差別や偏見がある人の割合
(136名対象)

※回収数137名に対し、重複回答1名除く。

72%と最も多い。

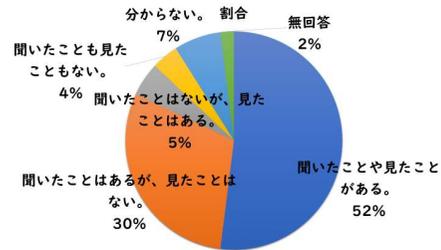


8

Ⅲ 結果② 単純集計の抜粋 (2)

* 吃音症を聞いたことや
見たことがある人の割合
(137名対象)

52%と最も多い。

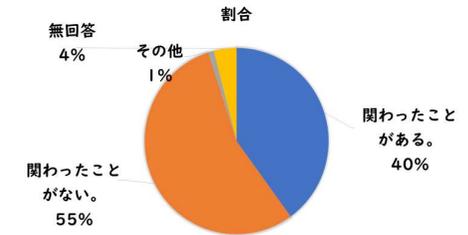


9

Ⅲ 結果② 単純集計の抜粋 (3)

* 吃音症の方と実際に
関わったことがある人の
割合 (吃音症を聞いたこと
や見たことある71名対象)

40%にとどまっている。
つまり**全体の20%**である。



10

Ⅲ 結果② 単純集計の抜粋 (4)

* 吃音症をどこで知ったかの割合
(吃音症を聞いたことや見たことがある71名対象)
※複数回答含む。

YouTubeの35%が最も多かった。
その他の記入欄は、**友達・同級生・先生・学校等**が多かった。

11

Ⅲ 結果③ 自由記述 (1)

Aさん：小学生のときの**同じクラス**に吃音症の人がいた。しゃべりたいことを**スラスラ**話せなくて**大変**そうだった。
Bさん：本人も吃音を**直したい**と言っていた。**苦し**そうであった。

12

III 結果③ 自由記述 (2)

Cさん：周りの男子から馬鹿にされているのを日常的にみていてつらかった。

Dさん：小学生のときに吃音症の友達がいた。どうして彼の話し方が変なのか理解できなかった。

Eさん：友達はみんな知らなかったからなのか「しっかりしゃべってほしい」「いつも何言いたいのかわからない」と言っていた。

13

IV 分析及び考察

*吃音症が障害の一つと認知されていない可能性と、具体的な症状に対する知識不足の影響。

*吃音症のある方が、怠けている、ふざけて話している、やる気がない等、周囲から誤解を受けやすい。

*吃音症の方にとって、無理解な社会で日常生活を送ることは、単に暮らしにくいだけではなく、二次的な精神障害を発症するなどの負の連鎖が生じやすい。

14

V 結論・今後の課題①

*吃音症そのものと、吃音症を始めとする見えない障害への関わり。

*発話障害に対する理解・関心を発信していく必要性。

*吃音症を始めとする見えない障害者との実際の関わりを積極的に行っていくことの重要性。

15

V 結論・今後の課題②

*実体験として関わることで、抱いていたマイナス側面をプラスへの転換が期待できる。

*当事者としての生活のし辛さの聞き取りを通して、関わり体験や共感的理解を促す機会を設ける。

16

<引用文献・参考文献>

* 厚生労働省

「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律」

https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaihashahukushi/sougoushien/dl/sougoushien-02.pdf

* DINF 障害保健福祉研究情報システム

「目に見えない障害のある大学生の就学支援：アメリカモンタナ大学の事例」

<https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/ld/dss.html>

* 国立障害者リハビリテーションセンター 「吃音について」

<https://www.rehab.go.jp/ri/departj/kankaku/466/2-1/>